

英語音声の聴解判断における日本語母語の影響

犬塚 博彦

1 はじめに

本稿は、日本人英語学習者が英語音声聴解の際に、日本語母語の影響がどのような形で現われるのかを調査する目的で、勤務校の岩手大学教育学部で平成23年度前期「英語音声学演習Ⅰ」においてリスニング実験を行ない、実験結果から見えてくる聴解エラーの要因を、(1) 話線と解析の方向性、(2) 言語形式における階層、の2つの視点を踏まえて分析し考察を加えたものである。なお、本研究は筆者が継続的に取り組んでいる日本語母語話者による英語音声聴解プロセス研究の一環として位置づけられるものである。

2 リスニング実験

2.1 実験方法について平成22年度以降の若干の変更点

リスニング実験の方法については、犬塚(2007b)においてすでに確立している方法に沿って行なうことを基本としたが、犬塚(2011:73)で触れたように平成22年度からは調査方法において若干の変更が加えられている。

具体的には、実験形態は被験者にとってその場で時を置かずに取り組める「ディクテーション」のみとし、以前の調査で「ディクテーション」にあわせて行なっていた「テープおこし」については今回も扱わないこととした。その根拠としては、(1) 本研究のように、聴解者が英語音声聴いて反射的にどのように判断したかという点から追究する場合は、筆者の実験で採用している「ディクテーション」の方法のみで十分に有効なデータが得られることと、(2) 「テープおこし」では、取り組み自体に時間がかかるため、必然的に時と場所を変えてそれぞれの被験者に自主的に取り組んでもらう形になり、その場合、被験者ごとにその精度に質的なばらつきが生じる可能性があることが判明したためである。

また今回の平成23年度の調査から新たに取り入れた方法として、「ディクテーション」の際に、「推測」で書き取った箇所には下線を付してもらうことにした。その根拠は、これまでの実験では、実際の音声資料とは全く聴覚的にも類似点の見出されない語が書き取られていることがしばしばあったことから、被験者が実際に聴いたと思った音声をもとに書き取ったのか、あるいは、はっきりと聴こえてはいなかったものの聴こえた別の箇所からの推測をもとに埋め合わせて書いたものなのかを区別する必要性を感じていたからである。

このほか、前回の平成22年度の実験からは、「ディクテーション」終了後に正しい英文との照合作業を行なう際に、被験者には、間違えて聴き取り書き取った箇所について、聴解エラーにつながる要因としてどのような判断がはたらいたのかということ、時を置かずに自省してもらい、その自省した聴解判断をミニレポートの形でその場で書いて提出してもらうことにしたが、これも今回の実験で踏襲した。

2. 2 犬塚(2007b)において確立している実験方法

以上が実験方法について平成22年度以降に変更を加えた点であるが、以下今回の実験においても踏襲した犬塚(2007b)で確立している方法について平成23年度の状態を踏まえて略述しておきたい。

岩手大学教育学部平成23年度前期「英語音声学演習Ⅰ」の履修者16名(2年生)を対象に英語の音声資料を用意し、平成23年5月から8月にかけて「ディクテーション」の実験を行なった。実験の方法は具体的には、(1) テープの音声を一度聴くたびごとにそれを書き取るという形で一つの英文について3回連続して行なったこと、(2) 書き取りの用紙には1回目から3回目まであらかじめ別々の欄をもうけて、後で聴解のプロセスが把握できるような形で実施したこと、(3) 筆記用具はボールペンを使用することとし、すでに終わっている箇所については遡って書き直すことは禁止とし、書き取ったものは終了時にその場で提出をもらったこと、である。

2. 3 音声資料

平成23年度の実験は、筆者が過去数年間にわたる調査において使用した音声資料のうち、本研究の目的である日本語母語の影響を調査するのに適していると判断したものを厳選したうえで上記の実験方法に沿って追調査を行なった。具体的には、石黒(2007:4-22)、浅井他(2002:27-33)、深澤他(1991:20-21)および尾山(2007:59-105)からあわせて22の文例を抽出した。このうち本論考では紙幅の関係から以下の3つの文例にその対象を限定して詳細に分析および考察を行なうことにする。なお実験ではいずれも上記図書に附属するCDを音声資料として使用した。

*本稿で分析対象とした文例

- 01) I don't agree with you.
- 02) He arrived here last night.
- 03) I could see her tomorrow.

3 分析と考察

3. 1 分析の視点

本節では、分析の視点として、聴解対象となる英語の音声連続を日本語母語話者がどのように解析するのかということについて、(1) 話線と解析の方向性、(2) 言語形式における階層、の2点について取りあげることとする。

3. 1. 1 話線と解析の方向性

一般に母語話者が母語の音声を聴解する時、聴解にあたって線形的に入力された音声連続は話線に沿って聴解者の頭の中で解析される。具体的には、英語母語話者は話線に沿って発せられる英語の語順のまま解析を行なう。これは日本語母語話者が日本語音声を聴解する場合も同様である。本論考では、日本語母語話者が日本語とは語順の異なる英語の音声を聴解する場合、英語母語話者と同じように話線に沿って英語の語順で解析が行なわれるのか、あるいは母語である日本語の聴解パターンが解析の過程で何らかの影響を及ぼすのかについて、分析を通して明らかにしたい。

3. 1. 2 言語形式における階層

3. 1. 2. 1 意義作用

次に、聴解対象となる英語の音声連続を日本語母語話者がどのように解析するのかということについて、言語形式における階層の上下関係の観点から触れておきたい。言語形式(linguistic form)とは、「言語音の連続の中に現われる聴覚的形式」と定義される(亀井他1996:391-392)。音声連続として示される言語形式の主要な機能は意思の伝達にある。音声による伝達においては、「一定の音形式を利用して、一定の概念に指向させること」であり、これは意義作用(signification)と言われる。意義作用について、話者-聴者の関係で、話者の側からこれを見れば、音声を通して話者が伝えようとしている意味内容が聴者の頭の中で喚起されることである。また、意義作用を聴者の側つまり音声聴解の観点から見れば、「一定の音形式を聞けば、一定の概念が自動的に喚び起こされる」ことである(亀井他1996:54)。

ところで、言語形式は階層(hierarchy)をなしている。マルティネ(A. Martinet)(1960)が指摘しているように、発話された音声連続は、意味に対応して語に分節され、さらに語は音の単位に分節される(二重分節double articulation)。これを聴解に関して言えば、話者側で意思伝達のために発話された音声連続は聴者側で「音の層」と「語の層」の二重構造のなかで解析されるものと考えられる。

3. 1. 2. 2 「音の層」と「語の層」

日本語母語話者による英語音声の聴解判断について考察する際に、上に述べた「音の層」と「語の層」それぞれについてその視点を明示することにしておく。

まず「音の層」については、音声そのものの認識の成否が中心となるが、日本語母語による影響が発現するレベルが、単音・音節・アクセント構造（強弱/高低）など、日英両言語の音構造の差異のどの側面を背景としているのかを視野に入れる必要がある。

次に「語の層」についてであるが、語そのものを単体としてとらえた場合と隣接する語との関係性としてとらえる場合でその視点が異なる。前者においては英語の場合、語幹に含まれる語彙的(lexical)な意味を正しく認識しているかどうか、そして接辞として具現される文法的機能が音声連続の中で正しく認識されるかどうか分析の視点となる。

また「語の層」にはもう一つ別の側面があって、ある語が隣接する別の語と何らかの関係性において認識され、聴解者が入力音声を解析するなかで、まとまりをもった句・節そして文へと統語的に正しく組み上げられていけるかどうかという構造化の成否と、句・節そして文として正しい意味理解に至っているかがもう一つの分析の視点となる。

以下においては、本節で触れた「音の層」と「語の層」のそれぞれを視野に入れて、筆者が行なった英語音声の聴解実験のデータから日本語母語による影響が関わっていると思われる事例を3つ取りあげて、質的観点から個別具体的に考察を加えることにしたい。なお、分析と考察において提示したそれぞれの英文に続く部分は、①②③が「ディクテーション」におけるそれぞれ1回目・2回目・3回目であることを示し、アスタリスク(*)は間違えて聴き取った箇所、そして下線部分は被験者が推測で書き取った箇所を表わす。また、被験者にはディクテーション1回目で、聴こえてきた音声からイメージした意味内容を付記してもらった。

3. 3 分析

3. 3. 1 話線に沿って解析が正しく行なわれて正聴解となった事例

01) "I don't agree with you."

まず、話線に沿って解析が正しく行なわれた事例として01) "I don't agree with you." の聴解を取りあげることとする。この文は、ディクテーション①②③のすべてにおいて被験者全員が正しく書き取っていた。このうち被験者Aは、その内省のなかで、「[この表現は]十分聞き慣れていた。"I don't agree"まで聞き取れた時点で正解の文が見えていたと思う。」と報告している。これを被験者の言語表現

に即して解釈すると、「聴解者にとって既知の表現であれば、先を予測しながら聴くことが可能である」ということになる。

一般に、母語話者が母語の音声聴解する場合は、話線に沿って先を予測しながら順行的に解析を行なうものと考えられる(先読み解析)。本事例は一見すると英語母語話者と同じような「先読み解析」が成功したかのように見えるが、聴解者にとっての既知の表現、つまり、ある音声連続を英語の決まり文句としてそのまま記憶(チャンク理解)していたケースにあたると思われるので、完全な先読み解析というよりは「擬似的な先読み解析」であると筆者は考える。

3. 3. 2 話線に沿わずに解析が行なわれて誤聴解となった事例

以下においては、話線に沿わずに解析が行なわれて誤聴解となった事例について取りあげることにする。

3. 3. 2. 1 “He arrived here last night.”

まず、02) He arrived here last night.を取りあげる。この文例の聴解においては、被験者たちに英語音声を聞いたときに思い浮かべた意味を付記してもらった。

《事例1：被験者Bの場合》

02) He arrived here last night.

① *He here last night. 「彼は昨晚ここにいた」

② *He write here last night.

③ *He write here last night.

《事例1》で被験者Bが書き取ったものをみると、ディクテーション①では“*He … here last night.”と聴き取り、意義作用の日本語での表われとして「彼は昨晚ここにいた」という言葉に直しており、“arrived”にあたる聴解困難だった箇所を「いた」という語をあてていることがわかる。

このうち、英文後半の“here”“last night”を「昨晚ここに」という意味内容で正しく聴解していることについては、(1) 英語の文強勢が後方強勢(final stress)をとるためにこの部分に強さおよび明瞭さの点で際立ちがあること、(2) 音声連続の末尾にあつて、解析開始時点に最も近いことから短期記憶においても活性化されやすい、ことから説明ができる(大塚 2005a:63)。そして、英語の語順では文末に位置し、強勢が置かれるが故に明瞭に聴こえる“here”“last night”の音声連続を入力として、意義作用を通して被験者の頭の中に喚起された意味内容を手がかりに、「昨晚」から時は過去、「ここに」から場所に関する意味内容を連想して文脈創出を行なって、日本語の語順に沿って聴解の空白部分を推測して、「いた」

という語を補ったものと言える。つまり、この段階では完全に日本語を通しての思考法になっているものと考えられる。

次に、被験者Bは、ディクテーション②においては“*He write here last night.”と書き取っている。もとの英文にある“arrived”をこの被験者は“write”と聴いたのであるが、その背景を「音の層」と「語の層」の両面から考察したい。

まず、「音の層」つまり音声的な要因であるが、犬塚(2009)において考察したように、“arrived”のように弱母音で始まるVCVの型をとる英語内容語で、かつ第2音節に強勢が置かれる語については、「第1音節に含まれる弱母音が認識されることが多く、この場合、強勢が置かれる第2音節が『解析の起動点』となり、第2音節に含まれる母音を手がかりにして、『母語である日本語の耳』を介して第2音節に含まれるCV音の聴覚的印象から連想される語として聴解しようとする傾向が認められる」ものと考えられる(犬塚 2009:75)。つまり日本語母語のCV型の音節聴解パターンが干渉した事例と言える。

次に「語の層」の視点から考察する。ディクテーション②では、英作文だったらまずこうは書かないと思われる非文が書きとめられている。一般に和文英訳の場合は、母語を思考の言語として使用しながら反省的知識を活用しつつ、英語の特徴である呼応や一致に注意を払いながら文を組み立てていくことになる。ところで、もしディクテーション②の段階でこの被験者がその聴覚的印象から意義作用によって「書く」という意味内容を喚起したのであれば、それを英語に直す時に、“He”に対しては3人称単数現在の動詞形“writes”で呼応させるか、あるいは、“last night”の聴解をもとに意味内容に合わせて“write”ではなくて過去形“wrote”とするというような文法判断がはたらいともよかつたはずなのに実際はそうはなっていない。このことからディクテーション②では、被験者の認識が「語の層」まで達していないために意義作用は伴わず、従って文法判断が入る余地もなく、表面的な音声のみに反射的に反応して“arrived”/əraɪvd/に含まれる母音/aɪ/の残響をもとに/aɪ/音を含む別の語をあてはめたものと考えられる。

3. 3. 2. 2 “I could see her tomorrow.”

次に、03) I could see her tomorrow.を取りあげる。

《事例2：被験者Cの場合》

03) I could see her tomorrow.

① *I see tomorrow.

② *I will see tomorrow.

③ *I will see her tomorrow.

被験者Cは“could”にあたる部分をディクテーション①では聞き取れず、②において“*will”を推測で入れている。この被験者は、内省において、その根拠を「“tomorrow”があるために未来の形になるかもしれないという判断」がはたらいたと述べてつも、「何となく/d/で終わるような響きが残っていたが、“tomorrow”があるから過去形はあり得ないと判断してしまった」（下線は筆者による）と報告している。この背景には、「明日」が先行する場合は「会った」が後続するのはおかしいという日本語の語順に沿った判断（「*明日会った」）が展開されている。つまり、話線に沿わない解析においては、英語の側から見れば逆行的な方向で、そして日本語の側から見れば日本語の語順に合わせて順行的に思考が展開されて意味理解を試みていることから、聴解において日本語的思考法が影響を及ぼしている一例と考えられる。なお、被験者Cのこの報告からは、ディクテーション②においては、反射的というよりはすでに反省的知識を通しての文法解釈が試みられていることが読み取れる。ここでは聴覚的な残響と文法判断との間に揺れが生じたが、この場合は文法判断のほうが優先されていることがわかる。

4 結語

以上本稿では、平成23年度に行なったリスニング実験の結果分析をとおして、英語音声の聴解に際しての日本語母語の影響について、話線と解析の方向性の観点を踏まえて考察を加えてきた。その結果、以下のことが明らかになった。

聴解者が、英語の音声連続を語レベルですべて正しく分節できた場合は、話線に沿って解析を行なうことが可能となり、その方向は、英語の語順に沿って順行的に行なわれる。その場合、一見すると、英語母語話者のように、話線に沿って先を予測しながら解析を行なっているかのように見えるが、それが可能となるのは、聴解者にとって馴染みのある既知の表現のときであることが今回の実験で明らかになった。本論考ではこれを「擬似的な先読み解析」と位置づけた。

これに対して、発話された英語の音声連続の聴解にあたって、認識の空白域が生じている場合には、話線に沿った解析はもはや不可能となり、日本語母語による影響がさまざまな形で生じることが明らかになった。具体的には、音声レベルでは、「母語である日本語の耳」を介して日本語母語のCV型の音節聴解パターンが干渉することを指摘した。また語レベルでは、聴解者がある英語の音声連続を聴いて、それによる意義作用の表われとして一たび日本語を介してその意味内容が喚起されると、「思考の言語である日本語母語の頭」で、日本語の語順に沿って、日本語的な世界観のもとで意味の推測が行なわれることが本稿の考察を通して明らかになった。

註

- * 本研究は、平成23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))[課題番号:21520496, 研究課題名:「英語音声の聴解プロセスにおける日本語母語の干渉に関する研究」]の交付を受けて行なった研究成果の一部をまとめたものである。

参考文献

- 浅井達夫他(2002)『英語ヒアリング特訓本』, 東京:アルク.
- 石黒昭博(2007)『Forest音でトレーニング』, 東京:桐原書店.
- 犬塚博彦(2005a)「英語音声のリスニングとその意味理解」, 『東北英語教育学会研究紀要』第25号, 61-72.
- 犬塚博彦(2005b)「英語音声のリスニングとその統語処理に関する一考察」, 『岩手大学英語教育論集』第7号, 81-87.
- 犬塚博彦(2006)「英語音声のリスニングと文構造」, 『東北英語教育学会研究紀要』第26号, 11-22.
- 犬塚博彦(2007a)「英語音声のリスニングにおける聴解の精度と安定度」, 『東北英語教育学会研究紀要』第27号, 11-20.
- 犬塚博彦(2007b)「ボトムアップ処理の視点からみた英語音声の聴解プロセス」, 『言語の世界』Vol. 25, No. 1/2, 23-38.
- 犬塚博彦(2008a)「英語音声の聴解プロセス解明に向けての取り組み」, 『岩手大学英語教育論集』第10号, 81-88.
- 犬塚博彦(2009)「弱母音で始まる英語内容語の聴解のしくみ」, 『岩手大学英語教育論集』第11号, 66-78.
- 犬塚博彦(2010)「日本語母語話者による英語音声の聴解判断」, 『岩手大学英語教育論集』第12号, 46-51.
- 犬塚博彦(2011)「英語音声の聴解プロセスにおける相対的順位」, 『岩手大学英語教育論集』第13号, 73-80.
- 尾山大(2007)『英語の耳づくり』, 東京:ナツメ社.
- 亀井孝他編(1996)『言語学大辞典第6巻:術語編』, 東京:三省堂.
- 竹林滋(1996)『英語音声学』, 東京:研究社.
- 深澤俊昭他(1991)『英語ヒアリング集中レッスン基礎編』, 東京:アルク.
- Martinet, A. (1960) *Éléments de linguistique générale*. Paris: Armand Colin.
Tr. by E. Palmer. *Elements of General Linguistics*. London: Faber, 1964.